収蔵資料
展示の紹介

『外邦図で見る戦前のアジアと世界 –樺太（サハリン）–』

5月29日（土）～7月29日（木）　於 岐阜県図書館

■外邦図について

外邦図（がいほうず）は旧陸軍参謀本部及びその直属の独立機関として発足した陸地測量部（現国土地理院の前身）が、明治中期から第２次世界大戦末期にかけて作製・複製した自国の領土以外の地図です。包括する地域はアジアにとどまらず、シベリアから北米、アフガニスタン、オーストラリアにまで及ぶものです。しかしこれらの地図は、軍事機密であったために一般に知られることはほとんどありませんでした。

敗戦時、外邦図は連合国によって接収される可能性があり、またその前に処分されることも予測されたため、学術的価値を見いだした日本の研究者達によってその一部が緊急避難のような形で持ち出され、旧帝国大学等に保存されてきました。

軍事目的で作られた外邦図ですが、大半は、19世紀末から20世紀前期の地表景観の忠実な一般図です。このため、現在詳細な地図の入手が困難な地域の代用物にとどまらず、原図作製時の植生や土地利用などを読み取ることで地域の環境変化を知る手がかりを得ることができる資料としての価値があり、世界の共有遺産として地球環境問題など様々な場面でその利用への期待が高まりつつあります。

展　示　の　様　子

■利・活用について

当館では平成９年度より、東北大学、京都大学、東京大学、広島大学から約14,000枚の外邦図を収集しましたが、16年度以降も収集を継続していく予定です。

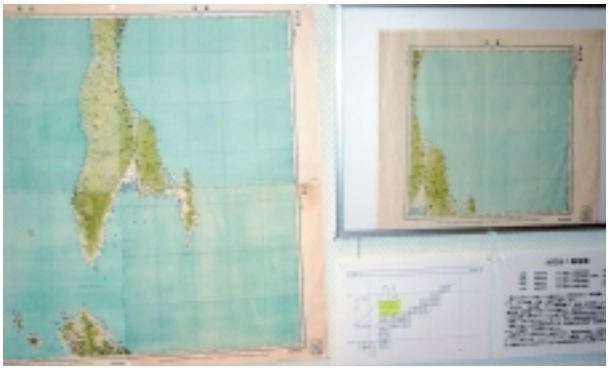
収集した外邦図はその活用を図るため、目録とインデックスマップの作製を行い、インターネットでも閲覧できるようにしてきましたが、歴史資料としての価値をより多くの方々に楽しんでもらうため、所蔵する外邦図を地域別に順次展示・紹介していくこととしました。

■展示の内容と作品について

第１回目となる今年度は、江戸幕府の時代からわが国との交易があり、1905（明治38）年から戦前まで日本の統下にもあった「樺太南部（現在の南サハリン）」を中心とした東アジアを取り上げ、様々な表現と縮尺の地図を展示･紹介しました。

「樺太」南部については、日本からの移民が多く開発が顕著であった地域（「大泊（おおどまり）」、「本斗（ほんと）」、「豊原（とよはら）」等）を選び、同一地域の領有当初と昭和初期の地図を並べて、開発の様子が比較できるように展示しました。

また、古地図（「樺太移民手引草」、「大泊市街全図」等）などの関係資料や領有当時の写真も併せて展示・紹介し、より興味深く見ていただけるように工夫ました。



「南樺太50万分１輿地図」